

社会的ネットワークを広げるために

鳥取大学農学部

若手灌漑技術者フォーラム代表

清水克之

2010 年度から日本 YPF（若手灌漑技術者フォーラム）の代表を務めさせていただいている。YPF は 1993 年に設立され、その目的は、「若手かんがい排水技術者の啓発、(1) かんがい、排水、洪水調整、環境分野等の専門知識や情報の交換の場 (2) 国際的なネットワーク強化、(3) ICID を若手専門家に深く理解してもらおう」ことである。また、日本 ICID 協会としても、日本 YPF が活性化すれば、若い会員が増えることになり、それが協会の活性化に繋がることを期待していると私は理解している。

私もその趣旨に賛同し、日本 YPF に参加している。日本 YPF の活動を通して、ネットワークが広がるだけでなく、自分自身が同年代の方たちから刺激を受ける点で非常に有益であることは間違いない。事実、日本 YPF の活動の一つである若手技術者の事例報告会に参加することで多くの刺激を受けてきた。

一方で、ICID 本部の YPF-WG の活動はどうかと言うと、昨年のジョグジャカルタ大会で YPF-WG に出席した時は、チェアマンを含む各国の YPF 代表のほぼ全員が新任代表または代理出席を含む初参加者が多く、また、欠席者も多かったため、発言等が非常に少ない状況であった。そのため、誠に情けない話ではあるが、スピーディで活発な議論の場ではなかなか発言しにくい私でも、日本 YPF の活動や議事に対する意見を発言しやすい状況であった点では好都合であった。

そうした状況で、特に活発な議論もなく粛々と議事が進行する中で、YPF の OB であるかなり年配の方が YPF を活性化するためのアドバイスとして発言された。氏は今の YPF を見て、もっと頑張りなさいと励まされたのである。氏からは 3 点のアドバイスを頂いた。1 点目は、YPF の活動に情熱を持って取り組むこと、2 点目はボランティア精神を示すこと、3 点目は今後のコミュニケーションを円滑にするための新しいコミュニケーションツールを活用することであった。情熱を持って取り組むこと、これは YPF が何をやる場所なのか、何をしたいのか、YPF を通じて個々が何をしたいのかをはっきりさせる必要があるだろう。それらが明確になり、メンバー間で合意が得られれば、活動に対する YPF メンバーのモチベーションが上がり、活動を行うために 2 点目のボランティア精神も付随すると思われる。最後のコミュニケーションツールについてであるが、氏は Facebook などのソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の活用を示された。ハードやソフトをはじめとする新しいツールの導入は、もちろん年代に関係なく、新しい物が好きな人が利用を始め、それがメディアや口コミを通じてその利用が広がっていくが、得てして若い世代がそのきっかけを作る場合が多い。大学の研究室においても、若手教員や大学院生がその研究室の PC 環境に大きな影響を与える例は多いと思われる。しかし、おそらく 60 代くらいと思しき方に Facebook を使ってみてはどうかと我々若手（YPF メンバー）がアドバイスされたことに、衝撃を受けた。そこで、社会的ネットワークの構築およびその強化のための新しいコミュニケーションツールの一つとして、Facebook を利用してみたので、このツールについて簡単に紹介するとともに、その可能性について述べたい。

現在、SNS として様々なツールがある。日本で広く使われているのは mixi や twitter で、そ

れに現在では Facebook が増えつつあると言ったところだろうか。すでに御承知の方も多いと思うが、Facebook とは 2004 年にマーク・ザッカーバーグがハーバード大学の学生が交流を図るためのサービスとして開始したのが始まりで、2006 年に一般に利用されるようになった。日本に導入されたのは 2008 年である。登録者数は 2011 年 5 月時点で、全世界で約 7.5 億人、日本では約 300 万人となっている (Wikipedia)。その開発のいきさつが映画「ソーシャル・ネットワーク」になったことや、今年初めに起こったチュニジアの革命に際しては、情報伝達ツールとして大いに活用されたことは記憶に新しい。しかし、我々の分野での利用者数は大変少ないと思われる。

私自身これまで SNS の類のツールに関しては Skype を除き、一切使ってこなかった。Skype は特に海外出張した時に家族と連絡を取る時に使う程度であり、極めてクローズドな利用である。仕事関係のやり取りはメールや電話で事足りると思っていたためである。

話を戻すが、YPF の OB の方から「Facebook の活用を！」と言われた時も正直なところ、今ひとつピンとこなかった。しかし、本稿の依頼を受けた時に、さて何について書けばよいのやらと思ひ悩んだ時に、Facebook のことが私の中にふと浮かんだ。そこで、Facebook の HP を開いて登録を試みた。登録自体はさしたる煩わしさもなく、10 分もかからずに終わる。自分の入力した学歴・職歴などの情報をもとに、この人は知り合いかもというリストが即座に表示される。Facebook は他の SNS と違い実名で登録することになっている。そのため、このリストは、実名で表示されるため、すぐに自分の知人であるかどうか判断できる。そこで、自分のネットワークに入りたい人がいれば、「お友達申請」をすればよい。

また、自分が使っているメールソフトのアドレス帳や送受信簿にあるアドレスを登録している Facebook 利用者も検索することができる。その検索をかけると、これまで仕事上でメールのやり取りをしたタイ、カンボジア、カザフスタン、エジプトなどの大学、研究所や役所の人たちが何人か上がってきた。やはり、海外での利用は盛んなようである。また、YPF のチェアマンも検索にかかった。そこで、彼に「お友達申請」をしたところ、すぐに私が見つけたことの驚きと先の震災で日本を見舞う返事が来た。彼は以前から使っていたが、YPF 用にアカウントを別にもう一つ作ったところであった。また、他の YPF メンバーもすでに始めていたのか私と同様に、最近始めたのか検索にかかった。さらに、数名の日本 ICID 協会の先生方もすでに Facebook を利用されていたため、「お友達」とはおこがましいと思いながらも「お友達申請」させていただいた。

おそらく、この Facebook などの SNS を利用しない方々の理由としては、必要性(わざわざ使わなくてもメールで事足りる)、時間的制約(忙しくてそんなことしている余裕はない)や職務上の制約(職場でそのような理由でインターネットは使えない)が挙げられるかと思われる。しかし、自分のネットワークリストに登録した人のネットワークを即座に把握することができる点は有用である。また、自分から積極的に情報を発信することは少ないのだが、自分にとって有用な情報を受信するアンテナを張る点では良いツールである。日本において Facebook は他の SNS と比べるとあまり利用されていないが、海外では最大の SNS であり、海外の ICID 関係者にも利用者が多いようである。ICID などの国際会議や学会でペーパーを発表することが私にとって一番大事な情報発信方法であり、ひいてはネットワークづくりに繋がるのだが、このようなツールを利用したネットワークの構築および情報の発信・受信も進めてみようと考えている。

参考

<http://ja.wikipedia.org/wiki/Facebook>